



雪中の声

小折 飴也

空は昨日と違い、突き抜けた青をしていた。太陽の眩しさに眇めた視界を、白く吐いた息が横切っていく。電車内で温まっていた身体が、息をするだけで再び冷えていくのを感じた。視線を下ろすと道端のあちこちに雪が積み上がっていた。濡れた路面が黒く浮かび上がっている。

小さな駅なので行列というのはないが、バス停の時刻表を確認する人や、誰かと電話を交わす人たちはいる。一方で、始発から運転を再開した電車に乗りうという人が、自分の横を抜けて改札へと向かっていった。

コートのポケットからスマートフォンを取り出すと、アプリにメッセージが入っていた。茶色のキジトラ模様をした猫の写真をアイコンにしているのは母だ。迎えが遅くなるという内容だった。雪に慣れない片田舎で、積雪はちょっとした事件だ。電車やバスが動いても、家の周りにはなかなか除雪が進まないということはある。タクシーを呼んだとしても、自宅前まで行き着くことは難しい。ましてや駅から歩いて一時間半、それも、ちょっとした坂道を登って行く実家は条件がより厳しくなる。

『じきに駆着く？ 悪いけど、一時間待って』

どうやら実家の方は未だ除雪に追われているらしい。

この小さな駅前には、寒さをまともに凌げる場所がない。目の前の商店街はとっくの昔に

シャッター街と成り果てていて、まともな店らしいものは夕方に開店する居酒屋だけだ。

しばらく猫のアイコンを眺めた。それから、母へと返事を送った。

『歩いて帰る』

荷物でいっぱいのリュックやスーツケースは重く、行けば行くほど足場は悪いかもしれない。だが、不可能ではないだろう。

ネックウォーマーを鼻の上まで引き上げる。

焦っては危ないからと自分の中で言い聞かせ、商店街とは反対の方向へゆっくりと足を踏み出した。

冬の空気は澄んでいるというが、地元はそれを顕著に感じる。澄み過ぎて、それが少し尖っているように思えるくらいだ。時折屋根に雪を残したままの車とすれ違う。バス停のベンチ前では、お年寄り数人がニット帽やマフラー、手袋ですっかり身体を覆っている。いつもとは違う地元の景色を目にしていると、ポケットから振動が伝わってきた。マナーモードを切り忘れたスマートフォンが高校時代の同級生からの着信を告げていた。

……どうしようか。用件は何となく分かっている。指先一つですぐに出られるし、特に話

せないような状況でもない。けれども正直、出る気分ではない。

しばらく画面を見続ける。振動はまだ続いていた。何度も何度も続く。なんだろう。いつもは気がつけばすぐに出ているので、これがいつも通りの長さなのか、それともいつもよりも長いのか分からない。どちらにせよ早くしろ、とこちらに呼びかけてくる。けれどもそのうち、今度はこちらが早く諦めてくれと言いたくなってきた。いっそ切ってしまうのか、と思った頃に、ようやく振動が止んだ。不在着信が一件と表示されると、ほう、と思わず息をつく。

枯れ草の伸びる小川にかかる橋で足を止めると、カワセミが一羽、背中の青を閃かせながら真っ直ぐに飛んでいく。餌を探すのか、それとも別に何か目的地があるのか。この冷え切った季節に、あの鳥はどうやって寒さを凌いでいるのだろうか。

バケツに残雪を山と積んだ親子が、庭先で歪んだ雪だるまを軽快に叩いていた。はしゃいだ子供の声と朗らかに笑う父親の様子からして、形を整えようとしているようだった。誰かにとつてのトラブルであっても、誰かにとつては楽しいイベントでもあるのがこの地域での雪の扱いだ。自分も昔は毎年、雪が降らないかと期待していた。

同級生からの電話からしばらくして、今度は母からの着信がくる。

「もしもし洋平、今どこ？ まさか本当に歩いているわけ？」

恐らくたった今メッセージに気がついたのだろう。早口にまくし立てる母に対し、敢えて口調をゆっくりとして返す。

「今ちょうど、薬局の辺り」

「薬局？ じゃあその辺りで待ってなさい」

「……そっち、除雪終わった？」

「車と家の周りにはね。道はまだ。でもここ、スタッドレスでも登って来られないような状況だから。危ないからね。歩いてくるなんて絶対だめ」

だったら帰るのをもう一日遅らせても良かったな。そう言ったら、家族はどう思うのか。夏休みは一日も帰らなかったの、だいぶ怒られるかもしれない。

「こっちは道は大丈夫だけど。電車もバスも走ってる」

「あー、昨日の夜、その辺りは雨だったみたいね。少しだけど。こっちはまた雪だったのよ」
電話越しにうんざりとした声が届く。一緒に聞こえたザクザクとした音源は、父か妹がスコップで作業している音だろうか。つまり、実家周りは昨夜の追加分まで雪をどけないといけないらしい。標高が少し変わるだけで、気候もあっさりと分かれてしまう。

「まあ、でも、とにかく大丈夫だから。じゃあ」

適当だと分かっているながら、そう言って電話を切る。古くからの住宅や田畑が並ぶ辺りまで来て、交通量も少なくなってきた。微かに吹いた風が前髪を撫でていく。やっと自分の時間ができた気がした。ずっと一人で歩いていたので、おかしい表現ではあるが。

だが母も諦めの悪い人だった。昔からそうだ。こうと決めてしまったら中々考えを変えない。そのことを、再びやってきたメッセージを見て改めて思い知った。

『はとこが近くに住んでるの。連絡しておいたから、その家で待たせてもらって』

「いや、なんでだよ」

思わず画面に向かって呟いた。親のはとこなんて、自分にとってはほぼ他人に等しい。ただ親の迎えを待ったためにお邪魔をするなんて迷惑でしかないだろう。小学生じゃないんだから。駅に戻った方がマシ、と思ったが、連絡済みという手回しの早さが恨めしい。

『全然知らない人なんだけど』

『大丈夫。年賀状はやり取りしてるから、向こうは洋平の顔を知ってる。たぶん』

せめてものの抵抗を込めて送った言葉への返事に脱力する。うちの年賀状は確かに毎年家族写真だ。けれど、そういう問題じゃない。

追加で送られてきた地図の画像を眺める自分の上空を、雀の群れが慌ただしく飛び去って

いった。

木と草花の多い庭だ。隅の椿が鮮やかな紅色を咲かせている。春になれば、もっと緑の広がる場所になるのだろう。縁側の硝子戸の向こう側は変わらず曇りない青で、外の冷たさを強調しているように見えた。エアコンが小さく稼働して、部屋を暖める音だけがする。大きな街へ出ればこれ以上無く人に溢れているというのに、ここはとても静かだった。

出された珈琲に少しだけ息を吹きかけて、ゆっくりと口にする。胃の底へと落ちていく熱さが冷えた身体に心地好い。深く豊かな香ばしさと旨味は、普段飲む缶コーヒーとは全然違う。

「どうぞ」

炬燵の上に置かれた藍色の陶器皿に、丸型のシンプルなチョコレートケーキが置かれていた。横に添えられた生クリームとミントがよく映えている。

「すみません。本当にお構いなく」

「助かったよ。作ったはいいけど、一人では消費しきれないからね」

その人は穏やかに笑うと、向かいの座布団を整えて腰掛ける。一人暮らしとは聞いていた

が、突然訪れた客人に手作りケーキを振る舞えるくらいには台所に立っているらしい。

一緒に出されたスプーンを入れると、中からトロリとチョコが流れてきた。……自分ならきつと、何年一人暮らししても、自宅でフォンダンショコラを作ろうとは思わない。

「甘さを控えてあるんだ。必要なら……そうだな、ママレードでも持って来るよ」

そう言いながら自らもケーキを口にするが、不満げな様子はない。きつと作った本人の好みに寄せられているのだろう。

「いえ、美味しいです」

「なら良かった」

お世辞で言ったつもりはない。目の前の男性、金沢さんもそのことは分かったようで笑って珈琲カップを手にした。ちよつとした会話をしている間にも、凍りついていた足の指先も温まり、ほぐれていく。

住所と名前を見て、何となく覚えのある人だった。幼い頃に挨拶くらいはしたことがあるかもしれない。実際、玄関先で彼は僕を一目見ると「当たり前だけど、背がずいぶん伸びたね」と口にした。

「マダガスカルがもう少し多くても良いかもしれない」

ポツリと向かいから呟く声でした。

「マダガスカル？」

「カカオの産地だよ。場所や農園によってチョコレート味が変わるから」

珈琲みたいだな、と思うが、自分にはよく分からないので美味しくいただく。どうやらこのケーキは、自分が思う以上にこだわって作られているらしい。

「せっかく帰って来たのに大変だったね」

レシピの調整だろうか。メモ帳に何かを書きながら言う。形式的な世間話というよりも、本当にそう思っている口調だった。

「ええ、まあ……。それより、年末の忙しい時期にお邪魔してすみません」

この家に入って何度目かになる謝罪をする。

「大丈夫だよ。幸いこの辺りは除雪もすぐ終わったし、割と早く溶けたから。掃除も終わって、あとはおせちの準備くらいだ」

「おせちも作るんですね」

「なかなか楽しいよ」

「うちはここ数年買っているので……手作りおせちって響きが懐かしいですよ」

「ああ、僕もたまには買おうか考えるよ。華やかで美味しそうだね。勉強にもなる」

それでも作るということは、よほど料理が好きなのだろう。自分も一人暮らしを初めてか

ら一応自炊をしているが、凝ったものとはとても挑戦する気にならない。

年始になればこの家にも親戚が集まってくるのだろうか。実家も新年を迎えたら叔父や叔母、従姉妹たちが来るはずだ。それを考えると、じきに迎えが来るという事実を思い出し、無意識に唇を引き結んだ。

金沢さんはこちらへ少し不思議そうな視線を向ける。特になにも、と口元を緩めて見せてから、気を取り直すように家の中を見渡した。いかにも昔からありそうな、和室と縁側。卓袱台に炬燵。おせちはともかく、フォンダンシヨコラという響きは絶妙にマッチしないように見える。けれどもそれが悪いようには思わなかった。むしろ、そのミスマッチさがこの場所の自由度を表していて、居心地を良くしているようにも感じる。

急に來てしまったという点を除けば、初めて訪れたというのに不思議と居心地の良い家だった。家族や友人たちの中にいる賑やかさも、一人部屋で過ごす静謐さも違う。

ふんわりと独特な酸味と苦味を持つチョコの風味を味わっていると、ふっと背後に気配を感じた。

「この子かな」

「ミャア」

「スズナ。目が覚めたかい」

滑らかに動く尾で背中に触れてくる。愛想良く返事をしたのは、小柄な三毛猫だった。額の辺りだけが黒と茶色が入り混じって、虎柄になっている。金色の瞳といい、綺麗な猫だ。身体をすり寄せながら、後ろを右に左にと足音もなくうろついている。それからしばらくすると、こちらの目をじっと見てニャアと鳴く。ご飯やおやつが欲しいというよりは、かまっでと言われている気がする。思わず視線を外した。こうしておけば、こちらへの関心も失うだろう。だが予想に反して頑固な猫だった。わざわざ回り込んでもう一度こちらの視界へと入ってくる。

「ニャー」

「……まいったな」

呟いたこちらの気持ちなど無視して、膝に乗ろうとずい、と丸い前足をかけてくる。見かねたのか、金沢さんが苦笑いをして猫を抱き上げた。ミ、と抗議するような鳴き声が短く上がる。

「悪いね。気に入った人にはよく甘えるんだ」

「いえ」

むしろこちらが悪いことをしたような気がして俯く。

「猫は苦手だったかな。君のお母さんと話した時に鳴き声がしたから、実家でも飼っている

のかと思っていたけど」

「あ、あの猫ですか」

メッセーシアプリのアイコンになっているキジトラの顔が浮かぶ。

「両親と妹の猫です。今年になって飼い始めたみたいで。ゴールデンウィークに会っただけです。僕は元々……」

言いかけて、すぐに口を噤んだ。スズナと呼ばれた猫が、抱っこされたまま金沢さんを見上げる。

「ん？」

「……猫は嫌いじゃないんですけど、特別に好きというわけでもなくて。でも、良い子ですね。スズナちゃん」

「ありがとう。身内の立場だと、つい鼻根目に見るから。君にもそう言ってもらえると嬉しいよ」

その台詞に誤魔化すように、曖昧な笑みを作った。金沢さんがそれに気がついたのか分からない。けれども腕の中の子を見下ろすと、目を細めて顔を寄せた。

フォンダンシヨコラをゆつくりと食べ終えようとしている自分の前で、金沢さんはコピー用紙を広げていた。何かの論文か、ニュース記事のようにも見える。ところどころ入っている図の印象からして、生物か医療に関することだと察した。

「お仕事の関係ですか？」

じっと読み込む姿に、つい口にしてみる。金沢さんはそれに虚を突かれたように目を丸くし、それから困ったように眉を下げて首を横に振った。

「……以前だったら。けれど、性に合わなかった」

やや重い口調と共に触れた紙には、マウスの写真と数値が並び、何かの実験結果を示している。あまり触れられたくない内容なのだろう。ただ一言「そうですか」とだけ返した。

先程まで気にしていなかったが、小さな引き出しを乗せた戸棚には、何冊かの本も収められている。料理のレシピ本、日本の純文学や海外文学、科学誌、医学書、博物館の目録、音楽史といった具合に統一感がない。埃を被っていないので、きちんと掃除をされているか、普段から出し入れされているのか。

スズナは彼の腕から早々に抜け出し、今度は敷布の端で丸くなって目を閉じている。時折前足が空を掴むようにして動いているが、夢でも見ているのだろうか。

「ごちそうさまでした。本当に美味しかったです。食器は……」

「そのまま良いよ」

せめて台所まで運ぼうかと思ったが、家主がそう言うのでは下手にうろつくわけにもいかない。母から何か連絡でも来ていないかとスマートフォンを出してみるが、ここに来てからはずっと通知もなく黙り込んでいる。

手持ち無沙汰になり、何となくSNSを開くと指先で画面を弄ぶ。オススメ欄に「家にあるもので代用できる料理」というレシピがいくつか並んだ。普段からキッチンであたふたと検索をしている影響だ。

「金沢さんこういうこと、得意そうですね」

「とうとう？」

顔を上げたその人に、スマートフォンの画面を差し出す。

「代用品を使った料理か」

「節約レシピとか、ヴィーガン料理とか。色々ありますね」

「普段はしないけれど、条件の定められたものを作るのも面白そうだ」

少し考えるように視線が下へと逸れている。そのうち本当に作りそうな雰囲気だ。

「オリジナルと同じものなんてできないでしょうけど」

「代用品はコピーではないからね。また別の味わいがあるものさ」

スズナが同意を示すように、目を閉じたまま尻尾で軽く敷布を叩く。まあ確かに、と内心で同意しつつ、残っていた珈琲で唇を湿らせる。そのまま飲み干そうとしていたところに、手元が本日何度目かの振動をした。画面が通話を受け入れるか否かの表示へと切り替わり、そこには一度は無視した同級生の名前と番号が現れている。

どうしようかと思ったが、今回は目の前に金沢さんがいる。知り合いの名前が表示されているのに迷惑電話だという言い訳は通用しない。仕方なく「すみません」と頭を下げて腰を上げる。早足で玄関まで向かい、いつもよりも声を潜めて電話に出た。

「もしもし」

さすがに玄関までは暖房は効いておらず、ストーブもない。炬燵で温まっていた足裏が、ぴったりと冷えた床に触れる。

「あ、もしもし城木。今ちょうど年末の掃除してたんだよ。そしたら卒アル見ちゃって。卒業してまだ一年もたつてないのにもう懐かしいんだよなー。もう帰って来てる？」

「うん。まあ。……それで、何かあった？」

一応用件を聞いてみる。この一言を、相手は待ち構えていたようだった。

「えー、何かあったって……分かる？」

空々しい台詞にポケットに左手を突っ込みながら苦笑いをした。微かな息遣いをどう受け

取ったのか知らないが、向こうからは「さっすが。城木みたいな友達って本当に貴重なんだよな」と賞賛らしき声があった。

高校時代から彼と自分の関係は正しく「クラスメイト」というレベルだ。けれども「余所に言われたら困る愚痴と悩みと自慢話」があると、決まって自分のところへ連絡をしてくる。今回もやはりその類いのようだ。ならこのまま切ってしまうのか、という考えが頭の片隅にチラつく。

向こうが一方的に話を始めた辺りで、電話から僅かに耳を離れた。しばらく前は、真面目に話を聞いていた。溜まった感情をダストシュートされているだけだと理解したのは最近のことだ。

うん、へえ。大変だったね。すごいね。途中で自分が何の話を聞いているのか分からなくなりそうになったが、相槌を続ける。出来れば手短に終わらせたい。どうしようかと思った時、スルリと柔らかな感覚が足元を撫でた。

「ミャーア」

決して大きくはないが、澄んだ鳴き声が玄関に響いた。甘えたかったのか、スズナがこちらを見上げて目をクリクリとさせ、物言いたげにしている。

そしてその声は、電話の向こうにいる中垣にもしっかりと聞こえたらしい。

「何今の？ 猫？」

「ええっと、うん」

スズナの方へと目が向いているこちらをよそに、中垣は話し続ける。

「そういえば、何か飼ってるって前言ってたっけ」

「そうそう。でもこの猫は……」

状況を説明しようと口を開きかけたが、それより先に向こうの言葉が被さった。

「城木って猫、飼ってたんだ」

脳裏にパツと、キジトラ模様の猫が現れた。

「飼ってない！」

条件反射のように声を上げていた。一気に意識が現実引き戻されたようになり、指先が冷たくなる。中垣のあっけらかんとした、不躰な声に堪えが効かなかった。

メッセージ画面に表示された母親のアイコン、金沢さんが電話で聞いたという鳴き声。まだ実家に着いていないというのに、あの猫が存在を主張してきている。

思った以上に鋭く響いたせいとか、スズナが僅かにあとずさった。悪かったと謝りたいが、気持ちがあちこちへ飛んでしまい処理が上手くいかない。「ええ？ そうだっけ」と訝しそうにする中垣に氣遣うのが煩わしい。

「悪いけど今、出先だから。また」

無理矢理挨拶らしいことを伝えて切った。ゆっくりとしやがみ込んで、スマートフォンを床に置く。

「ごめんな」

向かい合い、両手でそつと撫でてやると目を細めて身体を寄せてきた。

両親たちはずっと作業をしていたのだろう。陽がだいぶ高く昇った頃合いに来た母は、冬だというのに額に汗を滲ませ、タオルを軽く頬に当てていた。長靴のまま来たので、玄関が濡れるからと慌ただしく外へ出る。朝方出た白い息は、この時間帯になると出てこなくなっていた。

「急だったのにありがとね。助かった」

「いえ、大したおもてなしもできず」

「手作りケーキと珈琲ご馳走になったけど、美味しかったんだ」

「お粗末さまでした。こちらこそ、立派な物を頂いてしまって」

開いた玄関扉の向こうに置いた発泡スチロールへ目を向け、金沢さんは恐縮した様子だっ

た。父の実家から送られてきた寒ブリだ。母はきっと、この人が料理好きだということを覚えていたのだろう。

「いいのいいの。もう一尾あるから」

「ありがとうございます。ごちそうさまです」

「じゃあ、帰りましょうか」

母のあっさりとした一言の後、自分も会釈して車に乗り込む。

運転席に母がいて、助手席に座る自分。見覚えのある車の消臭剤の匂いや、妹がつけた交通安全のお守り。それだけで、もう半分実家に着いてしまったような感じがした。

サイドミラーに目をやれば、見送ってくれている金沢さんの姿が見えた。スズナは帰る時には炬燵布団の上で丸まっていたので、きつとそのままそこにいるだろう。

「帰ったらフクちゃんのこと構ってあげてよ。お盆もバイトだとか言って帰ってこなかったし」

そうだ。だから年末年始は帰ってこいと言われていた。

「んー。そうだね」

「洋平、意外だけど猫あんまり好きじゃないのね」

そういうことじゃない。好きだとか嫌いだとか、そういう話じゃない。けれども、せつか

くあの猫を可愛がっている母たちを前にして、わざわざ言う必要はない。

遠くに見える、濃紺の山の方向へ向かって景色が動いていく。小さな病院も、コンビニも、脇にあるのは見慣れた場所で、一度帰ったゴールデンウィークの時から何の様変わりもししていなかった。当然、懐かしいと思うほどの時間はたっていない。けれども、今の自分はこの馴染みある光景の中にずっといたいと思っている。

帰るのが怖いのだ。

翌日、今度は金沢さんから実家へ連絡が来たのは、まるでそれを見越していたかのようにだった。

雪さえ消えてしまえば、それほど辿り着くのに困るような場所じゃない。

ガレージで眠っていた高校時代のMTBを引っ張りだして走れば、耳が切れるんじゃないかと思うくらいの風が身体を吹き抜けた。

あの人はどうやら、雰囲気にして行動派らしいと、連絡された内容で知った。

「フォンダンシヨコラを改良してみたんだ。君にも味を見て欲しいけれど、どうかな」

チヨコレートの配合について言っていたが、もう実行したのか。驚きながらも了承して、

すぐに家を出た。

到着してすぐ居間へ通されたが、スズナの姿はない。どこか別の場所へいるのだろう。昨日金沢さんが座っていたところには、珈琲カップと一緒に一枚の葉書が置かれていた。目に入ったそれには、見覚えがある。

「あの、これ」

「うん。そうなんだ。思い出して探してみた」

もう一つのカップの前に勧められたまま座る。葉書には、うちの家族が日帰り旅行先の花畑前で撮った写真が「謹賀新年」の文字と一緒に印刷されている。去年の年賀状だ。そういえば、母がやり取りをしていると言っていた。

今年ではなく、去年のものをを出してきたのは敢えてだろう。左下の方には小さめの枠に、墨のように黒く、綿毛のように優しげな見た目をしたウサギがこちらを見ていた。横には「ダシ・十二歳」と書いてある。

「可愛い子だね。犬猫の写真はたまに見かけるけれど、ウサギは滅多にないから印象的だったよ」

「……やっぱり小さいな」

そう言っ て目を伏せると、もうすべてを理解しているという風に金沢さんは何も言わない。

今年送った年賀状には、ダンの写真は入っていない。

「こう見えて、やんちゃなんですよ。頭が良くて、こっちの言っていることもよく分かっているのに、抜けているところもあって」

なるべく暗くならないように声を出す。

「一年半が過ぎました」

何が、とは言わなかった。正しくは言えなかった。未だに声に出したくない。

十二歳は長生きと言っている。ペットというよりも兄弟という表現の方がしっくりとくる。ダンがいない日々というのは、泥沼のように長く感じた。嵐に巻き込まれたように短くも感じた。どちらにせよ、時の過ぎる感覚がまともではなかった。

「僕にとって、何が一番怖いかわかりますか」

「分かるよ」

答えなど求めていなかったのに、当たり前のようにサラリと口にする。

「それはきっと、一緒にいた時間を上書きしてしまいうる、毎日の当たり前が変わっていくこと。……ダンのいない日常」

カップの水面を見たまま、黙って頷いた。まさにそうだった。道具しか入っていないケージ、入れ替えてやっても減らない水や餌の空しさ。もう染みついてきた習慣が、無意味なも

のになったこと。何よりいつも撫でて欲しいと訴えていた視線は、家中を探しても見つからない。

「君は、猫が嫌いなわけじゃない。むしろ本当は好きなんじゃないかな。ただ、実家で新しく飼い始めた子が、ダンの存在を薄くしてしまうことが怖い」

金沢さんの声は、あくまでも静かだった。こちらに大げさな同情を向けるわけでも、責めるわけでもない。ただそこにあるものを見ているだけ、といった様子だった。

昨日広げていたマウスの論文、そして以前の仕事を「性に合わなかった」と重く語る金沢さんの表情を思い出す。なるほど。確かにこの人には向いていない。

「猫……フクは、知り合いから保護猫の話があつて。僕が家を出てからトライアル期間を過ぎて引き受けたと言っていました。ゴールデンウィークに帰った時に初めて知って……」

馴染んだ実家に帰ってきたと思ったら、その様変わりした景色に愕然とした。猫用のトイレやおもちゃ、水入れに餌皿、爪とぎ用の道具を収めた段ボール箱。リビングの隅にはキャットタワーもあった。ソファにはダンのものとは程遠い色をした毛がいくつもついていた。

「見て。可愛いでしょ」

「フクっていうの。撫でてあげて」

そう言った家族はキジトラ模様の猫を抱っこして笑っていた。正確に言えば目だけが笑っ

ていなかった。どこか不安げに、こちらに許しを求めるように揺れていた。

誰も悪くないのだから、怒りようがない。引き取り先を探していた知り合いも、保護猫を引き取ることを決めた家族も、やって来た猫も、何も悪いことなどしていない。所在のない猫が野良として過ごすことになるよりずっと良い。それでも思ってしまった。

「まだ一年しかたつてないのにつて、思いました」

じゃあ何年なら良いのかと言われても答えられない。どうしようか分からなくなり、その場を取り繕うように笑い、指先だけ掠めるように頭を撫でた。柔らかく艶やかな毛並みだったが、ウサギより少し固かった。

夏休みはアルバイトを入れて、忙しいからと帰らなかった。

「どうしたいのか、自分でも分からないんです」

家族にいつまでも悲嘆に暮れて欲しいわけではない。新しい家族を迎えることを否定したいわけではない。けれどもあまりに猫のために用意された部屋を見ると、ダンのいた世界はどこへ消えてしまったのかと詰りたくなった。

「すみません、こんな話をして」

赤の他人に話すようなことではない。これでは中垣のことをどうこう言う権利はなかった。

「……クローンペットって知っているかな」

不意に、そんな言葉が向かいから聞こえた。耳慣れない言葉が突然出て来たことに困惑しながら、重い首を横に振る。

「ここ数年、海外で伸びているビジネスだ。亡くなった犬や猫と同じ遺伝子を持った子を、新しい命として生む。クローン技術を利用してね」

クローンと言われれば、咄嗟に浮かんでは有名な羊の話だった。

「同じ遺伝子、ですか」

まったく同じ姿をしたペットが、飼い主の前に姿を見せるということか。

「金額は決して安くはないし、今はまだ成功率も低い。それでも需要はある」

「でもそれ、あくまでも同じ遺伝子を持った“別の存在”ということですよね」

「その通りだよ。共に過ごした時間を持つ、かつての家族ではない」

この人は何を言いたいのだろう。

「じゃあ、AIに故人の情報を覚えさせて、画面上で再び話せるようにするという話は？ これも実際に行われていることだ。相手はちゃんと、かつての記憶や人格を持っている。この先もっと技術が進めば、いつかは姿も人格も再現させることができるかもしれない。SFのようだけれど」

「……何が言いたいんですか。会いたいなら、ダンの“代わりになる存在”を作れば良いと？」

ついに疑問を口にすると、「いいや」と金沢さんは首を横に振った。

「僕は君の家族が猫を迎えたことや、蘇りというものを肯定したいわけでも否定したいわけでもない。言いたいのは、大切な存在がいなくなったことを受け入れられている人なんて、ほとんどいないということだ」

顔を上げると、カップを手にして一拍間を置いている。

「寂しさですぐに亡くなったペットと同じ種類の犬を飼う人、まったく別の生き物を迎える人、同じ遺伝子を持つクローンを求める人、AIで同じ記憶を持つ相手と話したい人、日常の変化が怖い人……皆方向性が違うだけだ。時間がたてば少しずつ受け入れられる、とも言うけれど、それはただ“日常生活に支障をきたさない”というだけだ」

カップからうつすらと立ち上る湯気が、睫毛の辺りを撫でて湿らせていく。

「君はきつと、家族が猫をよそへ譲ると言ったら反対するだろうね。猫のために、手放すことはできない。邪険にすることだってできないだろうね。けれど、ダンがいらない事実を受け入れることもできない。家族や誰かの前で、苦しみを言うこともできない。それで良いんだよ。そういう苦しさを、一生抱えていくんだ」

それはまるで預言のようだった。

「なら、どうすれば、どうすれば良いんですか」

「どのみち解決なんてしないんだ。苦しめばいい。……そう思える子と十二年も一緒にいられたことは、幸せな事実なんだと僕は思うよ」

最後の言葉に、湿った睫毛のままで小さく笑い返した。少なくとも、自分では笑ったつもりだ。

でももしかしたら、金沢さんには泣き笑いのように見えたかもしれない。

「さて、そろそろ焼ける頃かな」

金沢さんが、席を立ち居間を出て行く。それを聞いてようやく、チョコレートの良い香りが部屋に満ちていることに気がついた。

いつの間にか、足音もなくスズナが入室してきていた。隣の襖が細く開いていたので、そこからすり抜けるように来たのだろう。こちらに気がつく、「いたのか」と言いたげに尻尾を揺らして近づいてくる。それから昨日と同じく、前足をかけてゆっくりと膝の上へと座り込む。僕はその背中に、そっと手を当てた。やっぱり猫の毛はダンよりも少しだけ固く、膝にかかる温もりの重さは何倍もある。顎の辺りに指を添えると、低くグルグルと喉を鳴らした。

外からジージー、と短く鳥の声がする。シジュウカラの群れだ。庭木に止まっているのだろう。雪が溶けて、新しい年を迎えれば、やがて春も訪れる。春はダンが生まれた季節だ。

山や街並みを彩る桜を、幸せな気持ちで眺めることはできないだろうけれど、それで良いのだと思えた。

せっちゅう こえ
雪中の声

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 こおり あめや
小折 飴也

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし、主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとし、

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

澄んだ空気をした年末。
帰省した大学生の洋平は、
親戚である金沢という男性
の家を訪れる。フォンダン
シヨコラを食べながら穏や
かな時間を過ごす洋平だ
が、家族に言えないある思
いを抱えていた。大切な存
在へ思いを巡らせる物語。

